

「十八道念誦次第」ご真言和訳ノート

ここに言う「十八道念誦法」は、真言宗智山派「加行次第」の「十八道念誦次第」中のいわゆる「礼拝行次第」と、「聖如意輪觀自在菩薩念誦次第」を言う。ご案内の通り、加行に入ると最初に「礼拝行」を行い、次いで「如意輪法」を修する。真言密教瑜伽行の基礎・基本となる観法である。

「如意輪法」に入ると、まだ道場莊嚴や壇上莊嚴や『理趣經』もおぼつかない初心の行者は、覚え難い「印」の結びや、日本語ながら見慣れない文字や聞き慣れない専門語が続く観(想)文に、ひらがな表記とはいえ文字は読めても意味がわからない「真言」「陀羅尼」に戸惑い四苦八苦する。

道場莊嚴や壇上莊嚴は何度もくり返すうちにおぼえられる。「印」や「観念」「観文」も、くり返し唱えることで会得しまた読めるようになる。しかし「真言」「陀羅尼」は、字面は唱えられても、サンスクリット(梵語)を心得ない人には、何を言っているのか意味がわからない。口伝の伝統では読みは伝授されるが「真言」「陀羅尼」の意味は伝授されないのである。「念誦法」そのものが秘儀であり、「真言」「陀羅尼」は口密の「如来語」「秘密語」であって、「三密加持」の際本尊と行者が一体(「生仏不二」となる秘儀の秘語である。古来、真言密教では意味よりも唱えることが第一義となっている。

然るに、インドの密教僧は、自国語(サンスクリット)の「真言」「陀羅尼」は当然誦しながら同時に意味がわかつていた。例えば、降三世の「オンソバニソバウンバザラウンハッタ」を聞けば自動的に、「オン」はマントラの最初にくる聖音(プラナヴァ)「Om(オーム)」であり、「ソバニソバ」とは「sunbha(シエンバ)」と「nisumbha(ニシエンバ)」というヒンドウ神話に登場するアスラ族の兄弟王で、原語は「暴虐」「殺戮」といった意味であり、仏教に従わないシヴァ神と妻のパールヴァティーを、金剛手菩薩がシエンバニシエンバの姿(忿怒尊)になって踏み殺し、命を再生させた上で調伏したエピソードが頭に浮かび、「ウン」は「hūm(フーム)」で、堅固な菩提心やその堅固な菩提心で諸魔を恐れさせる意味から「清浄」「驚覚」「忿怒」を象徴する聖語(一字真言)であり、「バザラ」は「vajra(ヴァジュラ)」で、サトリや菩提心の堅固なことを意味することや、その堅固さを象徴する「金剛杵」が思い浮かび、「ウンハッタ」は「hūm, phai(フームハット)」で、忿怒尊(降三世)を象徴する聖語(一字真言)であることが瞬時にわかる。

思うに、恵果和尚をして「待つこと久し」「すぐに灌頂を」と言わしめた若き日の大師もインド僧のレベルにあつたにちがひなく、大師は奈良の大安寺で靈仙らとサンスクリットや悉曇を相当なレベルまで学び、長安ではインド僧の般若三藏・牟尼室利三藏から手ほどきを受けていた。そのサンスクリットの語学力のレベルは『三十帖策子』の「赤入れ」にもその片鱗が見える。伝法灌頂の受法に必須の「真言」「陀羅尼」のサンスクリットが、聞けばその意味がすぐわかるレベルになつていたからこそ、入唐して間もない大師を恵果和尚は付法の弟子に抜擢

したにちがいない。唐の時代の中国密教は、インド僧並みのサンスクリットの語学力がなければ伝法灌頂を許可しなかったに相違ない。惠果和尚の下には諸外国からの留学僧も含め幾千人の弟子がいたと言われているが、なかなか伝法灌頂の受法を許されなかったことはそのことに起因するのではないか。「早く帰り東国にこの法を広めよ」というのが大師の奇跡的な伝法灌頂受法の理由だと言う向きもあるが、惠果和尚は「東国」だけを重視したわけではなく、「南方」(ベトナム・チベットなど)にも、「北方」(満州・モンゴルなど)にも、「西方」(西域・中央アジア)にも、すぐれた法器さえいれば伝法灌頂を許可し、それぞれの国や地域においての密教弘法を命じたはずのインターナショナルな師であつたと私は考えている。

ともあれ、「真言」「陀羅尼」は中国においてもインド言語(サンスクリット)のままに唱えられるべきが儀則となつた。それに従つて、漢訳の訳経僧らは「真言」「陀羅尼」を音訳した。例えば、「vajra ヲアジエラ」を「轉日羅 ばんぢら」に、「satva サットヴァ」を「薩埵 さつた」に、「sarva サルヴァ」を「薩縛 さらば」に、「tathagata タターガタ」を「怛他彙多 たたぎやた」などとし、インドの或る字体をもとにした悉曇でも音表記した。

わが国の真言密教は漢訳の儀軌によつたため、儀軌類に出てくる「真言」「陀羅尼」は漢訳か悉曇表記である。明治生まれの私の祖父の年代では師僧の次第を書写したもので、祖父が遺した手書きの次第には漢訳や悉曇による「真言」「陀羅尼」が見られる。意味はわからなくても書写し、受持し、読誦することが第一義であつた。

そういう経緯や伝統の意味を多少はわきまえた頃、師父の縁で親しくさせていたでいた高井隆秀先生（真言宗智山派総本山智積院化主第六十六世、京都市上品蓮台寺、種智院大学名誉教授）や三神榮昇先生（真言宗智山派事相阿闍梨、京田辺市観音寺）に「真言・陀羅尼を和訳してはいけないのですか」と思いうがりの愚問を呈したことがあった。お二人とも苦笑をされて「真言・陀羅尼はアディシユターナや、誦持するものや」「まあ、長澤先生（父のこと）に聞いてみるこことや」というご返答だった。

以来、「真言」「陀羅尼」の梵文和訳はしてはいけないことなのだと思っていたところ、昭和四十五年（一九七〇）、智山教化研究所（梶芳光運先生所長）から『智山教化資料 第四集 常用陀羅尼と諸真言』が出版され、「作法集」等の「真言」「陀羅尼」の漢訳・悉曇・梵文・和訳が明らかにされた。それ以前、高井観海先生（真言宗智山派総本山智積院化主第五十五世、元上品蓮台寺住職、元智山専門学校長、高井隆秀先生のご尊父）の『秘密事相大系』に念誦法のご真言に梵文と和訳が添えられていることを知っていたが、渡辺照宏先生（元智山専門学校教授、元東洋大学教授、インド学仏教学・サンスクリットのほか言語学の権威）の監修で、大鹿實秋先生（元東洋大学教授、維摩経の研究者、父の弟弟子）や宮坂宥勝殿下（総本山智積院化主第六十八世、岡谷市照光寺前住職）の執筆ということからして、私は「真言」「陀羅尼」を事相の儀則を越え、和訳して「教化資料」にしてもいい時代になったのだと思うようになった。

ここに供する「聖如意輪觀自在菩薩念誦次第」のご真言和訳は、先学が残された研究や新しい資料を参照しながら、不備は承知で敢えて私訳を付した。なお、用いた『次第』は、今から約五十年前に私が加行の際に使用した宗派刊行のものである。

十八道加行作法

如意輪觀音を本尊となす

毎日三時 一百日或は二十一日間

初夜作法

先 香華一前を備える

次 禮拜 五体投地 百八返禮拜 禮拜毎に左の禮文を唱える。

南無歸命頂禮 大聖如意輪觀自在菩薩 慙愧懺悔六根罪障 滅除煩惱滅除業障

次 着座 登禮盤 辨供 置次第 摺念珠 打金二丁

次 般若心經 七卷

次 理趣經 一卷

次 尊勝陀羅尼

(第一 歸敬尊德門)

のうぼう ばぎやぼつ たれいろきや・ほらちびしゆだや ぼだや ばぎやぼつ

Namo bhagavate trailokya-prativisṣṭāya buddhāya bhagavate

敬すゞき、三界で最も勝れた、仏陀(覺者)(づある)世尊に頂礼します。

(第二 影表法身門)

たにやた おん

tad=yathā om

然れば、オーン、

(第三 淨除惡趣門)

びしゆだや びしゆだや さんま・さんま・さんまんだ・ばばしゃ・そはらんだ・ぎやち・

ぎやかのう・そははんば・びしゆだ

viśodhaya viśodhaya sama=asama=samanta=avabhāsa=spharaṇa=gati=gahana=svabhāva=

viśuddhe

清め給え、清め給え。比べもののない(くらしい)遍き光の輝きが(六)趣(六道)の深みに(まだ)遍満する本性で清められたものよ。

(第四善明灌頂門)

あびしんじやとまんそぎやたばらばしやのう・あみりたびせいけい まかまんだら・はだ
い あからあからあゆ・さんだらに

abhiśīcatu mām sugata-vara-vacana-amṛta-abhiśekai[r] mahā-mantra-padai[r] āhara āhara
āyu[h]=samdharaṇi

私を灌頂し給え。善逝(如来)の最も美しい言辞による甘露なる灌頂である、偉大な真言の
句によつて、(私に長寿を)もたらし給え、もたらし給え。寿命を維持するものよ。

(第五神力加持門)

しゅだや しゅだや きやぎやのう・びしゅでい うしゅにしゃ・びじやや・びしゅでい

さかさらあらしめい・さんそぢてい さらば・たたぎやたばろまやに しゃた・はらみた・

はりほらに さらば・たたぎやた・きりだや・ぢしゅたの・うぢしゅちた まかほだれい

ばなひら・きやや・そじかたのう・びしゅでい さらば・はらだ・はや・どろぎやさ・はりびしゅでい

śodhaya śodhaya gagna=viśuddhe uṣṇīṣa=viḥaya=viśuddhe sahasra=raśmi=samcodite
sarva=tathāgata=avalokanīṣaī=parāmitā=paripūrāṇi sarva=tathāgata=hrīdaya=adhīsthāna=

adhīṣṭhite mahā=mdrevajra=kāya=samhatana=visuddhe sarva=āvaraṇa=bhaya=durgati=
pariṣuddhe

清め給え、清め給え。虚空のように清められたものよ、仏頂の尊勝なることのように清められたものよ、千の光輝によつて発起されたものよ、一切如来を觀じるものよ、六波羅蜜を充分に満たしたるものよ、一切如来の心真言の威神力によつて加持されたものよ、(仏頂尊の)大印(を)持するものよ、金剛身の硬きことによつて清められたものよ、一切の障礙と怖畏と惡趣を充分に清められたものよ。

(第六壽命增長門)

はらちにほりたや あよく・しゅでい さんまや・ぢしゅちてい まに まに まかまに
たたた・ぼだ・くち・はりしゅでい

pratinivartaya āyu[hi]=suddhe samaya=adhīṣṭhite maṇi maṇi mahā=maṇi tathatā=bhūta=
koṭi=pariṣuddhe

(障礙などから、私を)避けさせ給え。壽命の清められたものよ、(如来との)平等撰持によつて加持されたものよ、マニ(宝珠)よ、マニ(宝珠)よ、偉大なマニ(宝珠)よ。真如が如実に存在する頭頂によつて充分に清められたものよ。

(第七定慧相應門)

びぞほだ・ぼうぢ・しめづらじやや じやや びじやや びじやや びんまら びんまら
visphota-buddhi-suddhe jaya jaya vijaya vijaya smara smara
(頭頂に)顕現した仏智に清められたものよ、勝ち給え、勝ち給え。打ち勝ち給え、打ち勝
ち給え。記憶し給え、記憶し給え。

(第八金剛供養門)

さらば・ほだ・ぢしめちた・しめづら ぼじり ぼらふ・ぎやらふ ぼざらん ばんぼと まま
しやりらん

sarva-buddha-adhiṣṭhita-suddhe vajri vajra-garbhe vajram bhavatu mama śāriram

一切の仏の加持によつて清められたものよ、金剛(のように堅固なもの)よ、金剛(のように
堅固なるもの)を蔵するものよ。私の身体を金剛(のように堅固なるもの)にし給え。

(第九普証清浄門)

さらば・さとぼなん しゃ まちや・はりびしめづい ならぼ・ぎやち・はりしめづい ならぼ・
たたぎやた・しししゃ めい さんまじうぼさえんどう さらぼ・たたぎやた・さんまじうぼさ・
ぢしめちてい ほうぢやや ほうぢやや びほうぢやや びほうぢやや ほうだや ほうだや
びほうだや びほうだや さんまんだ・はりしめづい さらぼ・たたぎやた・きりだや・
ぢしめたのう・ぢしめちた・まかほだれい

sarva=sattvāṇaṃ ca kāya=parivisuddhe sarva=gati=parisuddhe sarva=tathāgatās=ca me
samāsvasayantu sarva=tathāgata=samāsvāsa=adhiṣṭhite budhya budhya vibudhya vibudhya
bodhaya bodhaya vibodhaya vibodhaya samanta=parisuddhe sarva=tathāgata=hrdaya=
adhiṣṭhāna=adhiṣṭhita=mahā=mdre

また、一切の有情によつて、身体が十分に清められたものよ、すべての(悪)趣を清められたものよ、一切の如来はまた、私に激励し給え。一切如来の激励によつて加持されたものよ、目覚め給え、目覚め給え。よくよく目覚め給え、よくよく目覚め給え。覚り給え、覚り給え。よくよく覚り給え、よくよく覚り給え。遍く充分に清められたものよ、一切如来の心真言の加持力に加持された(仏頂尊の)大印(を持するもの)よ。

(第十成就涅槃門)

そわか

svāhā

成就あれ。

次 本尊大咒 二十一返

のうぼう あらたんのう・たらやあや のうまく ありや・ぼろきていじんばらや ほうじ・
さとぼや まか・さとぼや まか・きやろにきやや たにやた おん しゃきやら・ばりち

しんだ・まに まか・はんどめい ろろちしゆた じんばら・あきやりしゃや うん はった
そわか

Namo ratna=trayāya nama ārya=avalokiteśvarāya bodhi=sattvāya mahā=sattvāya mahā=
kāruṇikāya tad=yathā om cakra=vartti cintāmaṇi mahā=padme ru ru tiṣṭha jvala=ākarsāya
hūm phai svāhā
三宝に帰依します。聖なる観自在菩薩、大薩埵、大慈悲をもつ方に帰依します。然れば、
オーン、(法)輪を転ずるものよ、如意宝珠(をもつもの)よ、大蓮花(をもつもの)よ、破碎し
たまえ。破碎したまえ。起(こ)しまえ。光明によって(衆生を)攝取せんがために。

次 心咒

おん はんどめい しんだまに・じんばら うん

Om padme cintāmaṇi=jvala hūm

オーン、蓮華上の如意宝珠の光明よ、フーン。

次 心中心咒

おん ばらだ・はんどめい うん

Om varada=padme hūm

オーン、願を与える蓮花よ、フーン。

次 下座

五体投地三禮 禮文は冒頭の禮拜に同じ。

後夜(作法) 初夜の如し

日中(作法) 同じ

大師御前の所作(毎日)

先 香華一前を備える

次 三禮 五体投地 禮文なし

次 着座 前の如し

次 理趣經 一卷

勸請の句を弘法大師増法樂と唱え、回向の句は本尊と同じ。

次 禮懺

上十五日は金剛界(禮懺)

下十五日は胎藏界(禮懺)

次 尊勝陀羅尼 三返 (前にあり)

(第一帰敬尊徳門)

のうぼう ばぎやばてい たれいろきや・はらちびしゆだや ぼだや ばぎやばてい

(第二影表法身門)

たにやた おん

(第三淨除惡趣門)

びしゆだや びしゆだや さんま・さんま・さんまんだ・ばばしゃ・そはらんだ・ぎやち・
ぎやかのう・そははんば・びしゆでい

(第四善明灌頂門)

あびしんじやとまん そぎやた・ぼら・ぼしやのう・

あみりた・びせいけい まかまんだら・はだい あから あから あゆ・さんだらに

(第五神力加持門)

しゅだや しゅだや ぎやぎやのう・びしゅでい うしゅにしや・びじやや・びしゅでい

さかさら・あらしめい・さんそちてい さらばたたぎやた・ぼろぎやに しやた・はらみた・

はりほらに さらば・たたぎやた・きりだや・ぢしゅたの・うぢしゅちた まかほだれい

ぼざら・きやや・そうかたのう・びしゅでい さらば・ぼらだ・ばや・どらぎやち・はりびしゅでい

(第六壽命增長門)

はらちにぼりたや あよく・しゅでい さんまや・ぢしゅちてい まに まに まかまに

たたた・ぼだ・くち・はりしゅでい

(第七定慧相應門)

びそぼだ・ぼうち・しゅでい じやや じやや びじやや びじやや さんまら さんまら

(第八金剛供養門)

さらば・ぼだ・ぢしゅちた・しゅでい ぼじり ぼざらぎやらんい ぼざらん ぼんばと まま

しゃりらん

(第九普証清浄門)

さらば・さとばなん しゃ きゃや・はりびしゆでい さらば・きゃち・はりしゆでい さらば・
たたぎゃた・しつしゃ めい さんまじうばさえんどう さらば・たたぎゃた・さんまじうばさ・
ぢしゆちてい ほうぢやや ほうぢやや びほうぢやや びほうぢやや ほうだや ほうだや
びほうだや びほうだや さんまんだ・はりしゆでい さらば・たたぎゃた・きりだや・
ぢしゆたのう・ぢしゆちた・まかほだれい

(第十成就涅槃門)

そわか

次 四智讚

おん ばびらら・さとば そうきやらか ばびらら・あらたんのう まごたらん
ばびらら・たらま・きゃやたい ばびらら・きゃらま・きゃらろ はんば

Om vajra-sattva-saṃgrahād vajra-ratnam anuttaraṃ

vajra-dharma-gāyanāh vajra-karma-karo bhava

オン

金剛薩埵(に象徴される堅固な菩提心) 円明無垢な金剛智(を(本有し)保持するから) 大円鏡智、阿闍如来の仏徳)、

金剛の(ように堅固な、無差別平等なサトリの智慧である) 宝(如意宝珠)はこの上なきものである(平等性智、宝生如来の仏徳)。

(慈悲を以て衆生をよく観察し) 金剛の(ように堅固な) 教法を詠ずる(説法すること)によつて(妙観察智、阿弥陀如来の仏徳)、

(あなたは) 金剛の(ように堅固な) 行い(利他行)を實踐する者となれ(成所作智、不空成就如来の仏徳)。

次 大日讚

さらば・びやび はんば・ぎやらぎやりや そうぎやた・ぢはてい じのう たれい・たどきや・
まからんじやへいろしやのう のうぼう そとて

Sarva=vyāpi bhava=agra=agrya saugata=adhīpate jina traidhātuka=mahā=rajā vairōcana namo
'stu te

一切に遍滿せるものよ、有頂天の最上にあるものよ、善逝の主たるものよ、覺者よ、三界の偉大な王よ、遍照尊よ、あなたに頂礼します。

次 不動讚

のうまくさらば・ほだ・ほじ・さとぼなん　さらばたら　そうぐそびだ・びじゃ・らしべいの
うほうそつ　つ

Namah sarva=buddha=bodhi=satvānāṅ sarvatra saṅksumita=abhijñā-rāṣi vai namo 'stu te
svāhā

一切の仏・菩薩に頂礼します。一切処において、開華した智慧（＝神通力）の積み重ねをもつ
ものよ、あなたに頂礼します。成就あれ。

次廻向

上十五日は懺悔隨喜已下

下十五日は所修一切已下

次　大師寶號　百八返

念珠を摺り祈誓し、金一丁。

次　下禮

五体投地　禮文なし

理源大師御前(の所作)

大師御前の所作に同じ。理趣經勸請の句は理源大師増法樂と唱う。
廻向の後、

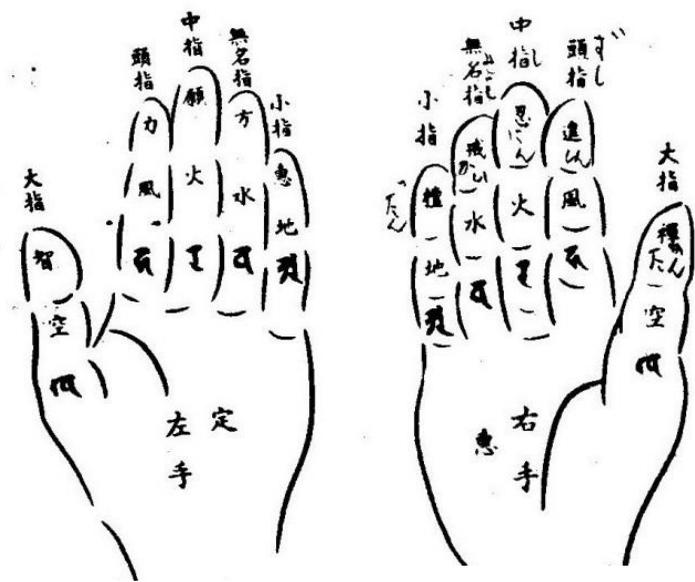
おん ばいたれいや そわか 百八返

Om maitreya svāhā

オーン、慈尊(弥勒尊)よ、成就あれ。

日中の所作終つた後、鎮守社寶前に參じて般若心經三卷、九社明神、三部大権現等の鎮守法樂を常の如く修して、念珠を招り祈誓する。

已上



■印を結ぶ際の五指の名称■

聖如意輪觀自在菩薩念誦次第

先入堂

次（壇前）普禮眞言曰

おん さらば・たたぎやた・はんな・まんなのう きやろみ

Om sarva=tathāgata-pāda=vandanam karomi

オーン、私は一切如来の御足に（頭をつけて）頂礼します。

次着座 結跏趺座或いは半跏座

辨供 置（開）次第 摺念珠 置念珠（三匝にして脇机の上）

次普禮（前にあり）

おん さらば・たたぎやた・はんな・まんなのう きやろみ

次塗香

五分法身を磨瑩すと想え、五分法身者（といつば）戒定慧解脱解脱智見なり

次三密観

うん うん うん

Hūm hūm hūm

フーン・フーン・フーン。

次淨三業

おん そは・はんば・しゆだ さらば・たらま そは・はんば・しゆど かん

Oṃ svabhāva-suddhah sarva-dharmāḥ svabhāva-sūddho 'ham

オーン、一切の(諸)法(観想の対象の実体とみなされる属性)(かたちや性質)(は本来(自性)清浄なものであり、私も本来清浄です。

※一切の(諸)法::「法(ダルマ) dharmā」に「存在」という訳語を充てるのが仏教研究の世界では常態化しているが、『俱舍論』第一章第二偈の註(「論じて曰く」)で世親が「dharma」を「svākṣaṇa-dhāraṇād dharmā」と自註し、それを玄奘が「能持自相故名爲法」(自相を持つが故に名づけて法と爲す)と漢訳していることから、「法(ダルマ)」とは「自相を持つもの」(事物・事象独自の形や性質(特質)を保つもの) (実在的「基体」という解釈が一般化した)がこれに対し、ブッダゴース(仏音)の「法(ダルマ)」の解釈のように「保たれるもの」(観察されるべきもの) (事物・事象のかたちや性質(要素・特質) (「属性」だという解釈も

あり、またさらにほかの定義や解釈もあり、それらをわきまえた上で、私は「観想の対象の実体とみなされる属性(かたちや性質)」と訳すことにした。「存在」という訳語を充てる場合は、西洋哲学が言う「個物」とか「普遍」「特殊」とか「存在」「存在者」などを一瞥しておかなければならないのではないか。言えることは、西洋哲学やインド哲学のように、仏教で言う「法(ダルマ)」は実在(存在論)ではなく、「観想」の対象であり、「縁起生」「無自性」「空(無実体)」「だ」ということである。

次佛部三昧耶

おん たたぎゃと・どはんばや そわか

Oṃ tathagata=udbhavāya svāhā

オーン、如来(＝仏)(部の諸仏)の出生に 成就あれ。

次蓮華部三昧耶

おん はんどぼ・どはんばや そわか

Oṃ padma=udbhavāya svāhā

オーン、蓮華(部の諸仏)の出生に 成就あれ。

次金剛部三昧耶

おんぼぞろ・どほんばや そわか

Om vajra-udbhavāya svāhā

オーン、金剛(部の諸仏)の出生に 成就あれ。

次 被甲護身

おんぼぢら・ぎに・はらちはたや そわか

Om vajra-agni-pradīptāya svāhā

オーン、金剛の(ように堅固な)諸魔を焼き尽くす(火の燃える輝きに 成就あれ。

次 加持香水

おんあみりてい うんはつた

Om amrite hūm phat

オーン、甘露(軍荼利(明王)よ、フーンハット。

次 加持供物

おんきりきり ぼぢらうんはつた

Om kilī kilī vajra hūm phat

オーン、櫛よ 櫛よ 金剛(杵)よ、フーンハット。

次 覧 字 観

らん らん らん

Ram ram ram

ラン、ラン、ラン。

次 淨 地

おん あらじゆ はぎゃたく さらば・たらまく

Om rajo 'pagatah sarva-dharmah

オーン、塵垢を遠離した一切の(諸)法よ。

次 観 佛

けん ばざら・たと

Kham Vajra=dhāto

カム(虚空よ)、金剛の(ように堅固な)世界(の諸仏)よ。

次 金 剛 起

おん ばざろ ちしゆたうん

Om vajra tisīha hūm

オーン、金剛(杵)よ、起ちたまえ。フーン。

次 普禮(前にあり)

おん さらば・たたぎやた・はんな・まんなのう きやろみ

次 表白(開白の座のみ)

「十八道表白」(P一一九)

謹(つつし)み敬(うやまつ)て眞言教主大日如来

次 神分

令法久住

次 祈願

仰ぎうけたまわり乞う

次 五悔

一切恭敬

次 淨三業(前にあり)

おん そは・はんば・しゆだ さらば・たらま そは・はんば・しゆどかん

次 普禮(前にあり)

おん さらば・たたぎやた・はんな・まんなのう きやろみ

次 歸命十方一切佛

次 發菩提心

おん ぼうじ・しつた ぼだはだやみ

Om bodhi=cittam utpādayāmi

オーン、私は菩提心を發起せしめています。

次 三昧耶戒

おん さんまやさ とぼん

Om samayas tvam

オーン、(発心した)あなたは(仏と)等同(平等、不二一体)です。

※三昧耶戒真言…ほかに次の二例がある。

①おん さんまや さとぼん

Oṃ samaya satvam

オーン、(仏と)等同(平等、不二一体)の薩埵(金剛薩埵)に帰依します。

②おん さんまや さとぼん

Oṃ samaya svam

オーン、(生仏の)等同(平等、不二一体)よ、金剛薩埵(ストヴァム)よ。

オーン、誓戒(三昧耶戒)よ、ストヴァン。

次發願

至心發願

次五大願

衆生無邊誓願度

次普供養三力偈

おん あぼぎゃ・ほじゃ まに・ほんどま・ばじれい たたぎゃた・びろきてい さんまんだ・

はらさらうん

Om amogha=puja mani=padma=vajre tathāgata=viokite samanta=prasara hūm
オーン、利益ある供養よ、宝珠と蓮華と金剛(の徳)をもつ如来の観察に普く遍満するものよ、フーン。

以我功德力ゝ

次 大金剛輪

のうまくしつちりや・ちびぎゃなん ただぎゃたなん あん びらじ びらぢ まか・

しゃきやらはじり さた さた さらてい さらてい たらい たらい びだ・また

さんばんじやに たらまち・した・きりや たらん そわか

Namah tri=adhvikanam tathāgatanam am viraji viraji mahā=cakra vajri sata sata sārāte
sārāte trāyi trāyi vidhamani sambhañjani tramati=siddha=agya trān svāhā

三世の諸如来に頂礼します。塵垢を遠離したものとよ、塵垢を遠離したものとよ、大輪よ、金剛(のように堅固なもの)よ、等しいものとよ、等しいものとよ、堅固なることよ、堅固なることよ、救済するものよ、救世するものよ、除去するものよ、破壊するものよ、二慧成就の最善なるものよ、トラーン、成就あれ。

次 金剛橛(地結)

おん きりきり ばぢら・ばじり ほら まんだ まんだ うん はった

Om kili kili vajra=vajri bhur bandha bandha hūm phat

オーン、橛よ、橛よ、金剛(のように堅固)にして堅固な大地よ、結縛したまえ、結縛したまえ、フーンハット。

次 金剛牆(四方結)

おん さらさら ばぢら・はらきやら うん はった

Om sāra sāra vajra=prakāra hūm phat

オーン、堅牢にして堅牢な、金剛(のように堅固な)垣根よ、フーンハット。

次 道場観

おん ぼく けん

Om bhūh kham

オーン、大地よ、カム(虚空よ)。

次 大虚空蔵

おん きゃきゃのう・さんはんば・ばぢらう ぐく

Oṃ gagana=sambhava=vajra hoḥ
オーン、虚空から生ずる金剛(のような堅固さ)よ、ホーホ。

次 小金剛輪

おん ばざら・しゃきやら うん じゃくうん ばん かく

Oṃ vajra=cakra hūm jah hūm bam hoh

オーン、金剛(のように堅固な)輪(法輪)よ、フーン、ジャハ(召し)、フーン(引し)、バン(縛し)、ホーホ(喜せしむ)。

次 寶車輅(送車輅)

おん とう とう うん

Oṃ turu turu hūm

オーン、(諸仏の浄土へ)渡り行きたまえ、渡り行きたまえ、フーン。

次 請車輅

のうまく しつちりや・ちびぎやなん たたぎやたなん おん ばざらう・ぎじよう・

きやらしゃや そわか

Namaḥ tri=advikānām tathāgatānām oṃ vajra=agni=ākarsāya svāhā

三世諸仏に頂礼します。オーン、金剛の(ように堅固な)火の燃え輝くことに 成就あれ。

次 召請

おん あろりきや えいけい えいき そわか

Om alolik ehi ehi svaha

オーン、泥土から生じたもの(清浄蓮華)よ、おいでください、おいでください。成就あれ。

次 四明

じゃく うん ばん こん

Jah hum bam hoh

ジャハ(召し)、フーン(引し)、バン(縛し)、ホーホ(喜せしむ)。

次 拍掌

おん ばざら・たら・としゃ こん

Om vaira=tala=tusya hoh

オーン、金剛の(ように堅固な)掌の悦びよ、ホーホ。

次 馬頭明王(馬頭観音)

おん あみりと・どぼんば うん はった

Oṃ amṛta=udbhava hūm phat

オーン、(不死をもたらす)甘露から出生するものよ、フーンハット。

次 金剛網(虚空網)

おん びそほらた らきしゃ ぼざら・はんじやら うん はった

Oṃ viśphurād rakṣa vajra=pañjara hūm phat

オーン、拡げ張ることにより守護したまえ。金剛の(ように堅固な)網よ、フーンハット。

次 金剛炎(火院)

おん あさんま・きに うん はった

Oṃ asama=agni hūm phat

オーン、無比なる火よ、フーンハット。

次 大三昧耶

おん しょうぎやれい まか・さんまえん そわか

Oṃ śrīṅkhale mahā=samayam svāhā

オーン、(三鉗を連結した)鏢よ、絶大なる一致(結縛)よ、成就あれ。

次 獻闕伽香水

のうまく・なまんた・ほだなん きゃきゃのう・なんま・なんま そわか
Namah samanta=buddhanam gagana=samāsamā svāha
遍く諸仏に頂礼します。虚空に等しく無比なるものよ、成就あれ。

以本清浄水へ

次 蓮花座

おん きゃまら そわか

Oṃ kamala svāha

オーン、(紅)蓮花よ、成就あれ。

次 振鈴

おん ばざら・さとば あく

Oṃ vajra=satva ah

オーン、金剛薩埵よ、アハ。

おん ばざら・げんだ・としゃ こく

Om. v. ajra=ghanta=tusya hoḥ
オーン、金剛(のように堅固な)鈴の悦びよ、ホーホ。

次 五供養(前供養)印明(理供)

先 塗香

のうまく・さまんた・ぼだなん びしゅだ・げんど・どはんばや そわか
Namah samanta=buddhanān viśuddha-gandha-udbhavāya svāhā
遍く諸仏に頂礼します。清らかな薫香の出生に 成就あれ。

次 華鬘

のうまく・さまんた・ぼだなん まか・まいたりや・びゅどぎやてい そわか
Namah samanta=buddhanān mahā-maitya-abhyudgate svāhā
遍く諸仏に頂礼します。大慈悲の顕現よ、成就あれ。

次 焼香

のうまく・さまんた・ぼだなん たらま・だど・ばどぎやてい そわか
Namah samanta=buddhanān dharmā-dhātu-anugate svāhā
遍く諸仏に頂礼します。法界に随入するものよ、成就あれ。

次 飲食

のうまく・さまんだ・ぼだなん あらら・きゃらら・ぼりん だだび ぼりん だてい まか・
ぼりく そわか

Namañ samananta=buddhānāñ arara=karara=balin dadāmi balin dade mahā=bali svāha
遍く諸仏に頂礼します。覆いをした施食を私は施与します。私は施食を施与します。大い
なる施食よ、成就あれ。

次 燈明

のうまく・さまんだ・ぼだなん たたぎやた・あらし・そはらだ・ばんぼさのう きやぎやのう・
だりや そわか

Namañ samananta=buddhānāñ tathāgata=arci=sphuraṇa=vābhāsana gagana=udārya svāha
遍く諸仏に頂礼します。如来の光焰のきらめきの照明よ、虚空の(ように)広大なものよ、
成就あれ。

次 壇上供具(一々捧獻(前供養、事供))

先 塗香 次 時華 次 焼香 次 飲食 次 燈明

次 四智讚

おん ばざら・なとほ そうぎやらか ばざら・あらたんのう まどたらん
ばざら・たらま・きやたい ばざら・きやらま・きやろ はんば

Om vajra=sattva=samgrahāḍ vajra=ratnam anuttaram

vajra=dharma=gāyanaḥ vajra=karma=karo bhava

オーン、

金剛薩埵(に象徴される堅固な菩提心＝円明無垢な金剛智)を(本有し)保持するから(大
円鏡智、阿闍如来の仏徳)、

金剛の(ように堅固な、無差別平等なサトリの智慧である)宝(如意宝珠)はこの上なきもの
である(平等性智、宝生如来の仏徳)。

(慈悲を以て衆生をよく観察し)金剛の(ように堅固な)教法を詠ずる(説法することによ
つて)妙觀察智、阿弥陀如来の仏徳)、

(あなたは)金剛の(ように堅固な)行い(利他行)を実践する者となれ(成所作智、不空成就
如来の仏徳)。

次 本尊讚

きやまら・ほきや きやまら・ろしゃのう きやまら・なのう きやまら・かさた きやまら・

はむ・ぼに きやまら・きやまら・なんはんば さきやら・まら・きしゃのう のうぼう そと

てい

Kamala=mukha kamala=locana kamala=śasana kamala=hasa kamala=hasta kamala=ābha=munī kamala=
kamala=saṃbhava sakala=malā=ksālaṇa namo 'stu te

(紅)蓮花の(よう)な顔たちのものよ、(紅)蓮花の(よう)な眼をもつものよ、蓮花座にある
ものよ、(紅)蓮花の(よう)な手をもつものよ、(紅)蓮花の光ある尊者よ、(紅)蓮花のなかの
(紅)蓮花から生れたものよ、一切の垢れを洗い清めるものよ、あなたに頂礼します。

次 廣大不空摩尼供(普供養)(前にあり)

おん あぼぎゃ・ほじゃ まに・はんどま・ぼじれい たたぎゃた・びろきてい さんまんだ
はらさら うん

次 三力偈

以我功德力

次 小祈願

普供養摩訶毘盧遮那佛

次 禮佛名號

曩謨摩訶毘盧遮那佛

次 入我我入觀

觀念せよ 本尊曼荼羅に坐し給う 我曼荼羅に坐せりゝ

次 本尊根本印

のうぼう あらたんのう・たらやーや のうまく ありや・ばろきてい・じんばらや ほうじ・
さとぼや まか・さとぼや まか・きやろにきやや たにやた おん しゃきやら・ばりち
しんだまに まか・はんどめい ろろ ちしゆた じんばら・あきやりしやや うん はつた
そわか

Namo ratna-trayāya nama ārya-avalokiteśvarāya bodhi-sattvāya mahā-sattvāya mahā-

Karuṇikāya tad-yathā om cakra-vartī cintamani mahā-padme ru ru tiṣṭha jvala-ākarsāya

hūṃ phat svāhā

三宝に帰依します。聖なる觀自在菩薩、大薩埵、大慈悲をもつ方に帰依します。是の如し。
オーン、(法)輪を転ずるものよ、如意宝珠(をもつもの)よ、大蓮花(をもつもの)よ、破碎し
たまえ。破碎したまえ、起こしまえ。光明によって(衆生を)摂取せんがために、フーン、ッ
ト、成就あれ。

次 心眞言(本尊)如意輪觀音(咒)

おん はんどめい しんだまに・じんばら うん

Om padme cintamani-jvāla hūm
オーン、蓮華上の如意宝珠の光明よ、フーン。

次、心中心真言

おん ばらだ・はんどめい うん

Om varada=padme hūm

オーン、願を与える蓮花よ、フーン。

次、加持念珠並に念誦法（正念誦）

おん へいろしゃのう・まら そわか

Om vairocana=māla svāhā

オーン、遍く照らす華鬘よ、成就あれ。

我欲拔濟無餘界

おん ばぢらう・ふんぎゃ・じやは・さんませい うん

Om vajra-guhya=jāpa=samayē hūm

オーン、金剛の（ように堅固な）秘密の念誦の境地で、フーン。

(心眞言(本尊咒)、前に同じ)

おん はんどめい しんだまに・じんばら うん

修習念誦法)

次 本尊の三種の印眞言(前にあり)

先 本尊根本印

のうぼう あらたんのう・たらやーや のうまく ありや・ぼろきてい・じんばらや ほうじ・
さとぼや まか・さとぼや まか・きやろにきやや たにやた おん しゃきやら・ぱりち しん
だまに まか・はんどめい ろろ ちしゆた じんばら・あきやりしやや うん はった
そわか

次 心眞言

おん はんどめい しんだまに・じんばら うん

次 心中心眞言

おん ばらだ・はんどめい うん

次字輪観

おん ばらだはんどめい うん

次本尊の三種の印真言(前にあり)

先本尊根本印

のうぼう あらたんのう・たらやーや のうまく ありや・ぼろきてい・じんばらや ほうじ・
さとぼや まか・さとぼや まか・きやろにきやや たにやた おん しゃきやら・ばりち
しんだまに まか・はんどめい ろろ ちしゆた じんばら・あきやりしやや うん ほうた
そわか

次心真言

おん はんどめい しんだまに・じんばら うん

次心中心真言

おん ばらだ・はんどめい うん

次散念誦

仏眼真言

のうほう ぼぎやぼと うしゆにしゃ おん ろろ そぼろ じんばら ちしゆた ちった・
ろしやに さらば・らた・なだにえい そわか

Namo bhagavate usnisāya om ru ru sphuru j'vala tīṣṭha siddha=locane sarva=artha=sādhanīye
svāhā

世尊、仏頂に帰依します。オーン、ル、ル、遍満したまえ、輝きたまえ、起ちたまえ。神通
力ある眼をもつものよ、一切の利益を成就するものよ、成就あれ。

金剛界大日

おん ばぢら・だと ばん

Om vajra=dhatu van

オーン、金剛界よ、ヴァン。

阿弥陀

おん あみりた・ていせい から うん

Om amita=teje hara hūm

オーン、(不死をもたらず)甘露の威光よ、運びたまえ。フーン。

本尊大咒(前にあり)

のうぼう あらたんのう・たらやーや のうまく ありや・ぼろきてい・じんばらや ぼうじ・
さとぼや まか・さとぼや まか・きやろにきやや たにやた おん しゃきやら・ぼりち
しんだまに まか・はんどめい ろろ ちしゆた じんばら・あきやりしやや うん はうた
そわか

本尊心咒(心真言に同じ)

おん はんどめい しんだまに・じんばら うん

本尊心中心咒(心中心真言に同じ)

おん ばらだ・はんどめい うん

聖観音

おん あろりきや そわか

Om āloḥik svāhā

オーン、泥から生じたもの(清浄蓮花)よ、成就あれ

白衣観音

おん しんぐいてい しんぐいてい はんだら・ばしに そわか

Om śvete śvete paṇḍara-vasini svaha

オーン 白きものよ、白く輝くものよ 白衣のものよ、成就あれ。

馬頭観音(前にあり)

おん あみりと・どぼんば うん はつた

大金剛輪(前にあり)

のうまく しつちりや・ちびきやなん たたぎやたなん あん びらじ びらぢ まか・
しゃきやらばじり さたさた さらてい さらてい たらい たらい びだ・まに
さんばんじゃに たらまち・しつた・ぎりや たらん そわか

一字金輪

のうまく さまんだ・ぼだなん ぼろん

Namo samanta-buddhāṇāṃ bhūm

遍き諸仏に頂礼します。ブローン。

次 五供養印明(後供養、理供)(前供養に同じ)

先塗香

のうまく さまんだ・ぼだなん びしゆだ・げんど・どはんばや そわか

次華鬘

のうまく さまんだ・ぼだなん まか・まいたりや・びゆどぎやてい そわか

次焼香

のうまく さまんだ・ぼだなん たらま・だと・ぼどぎやてい そわか

次飲食

のうまく さまんだ・ぼだなん あらら・きゃらら・ぼりん だだび ぼりん だてい まか・
ぼりく そわか

次燈明

のうまく さまんだ・ぼだなん たたぎやたあらし・そはらだ・ぼんばさのう ぎやぎやのう・
だりや そわか

次 献壇上供具(事供)(所作、前に同じ)

先塗香

次華鬘

次焼香

次飲食

次灯明

次 闕伽(前にあり)

のうまく・さまだ・ぼだなん ぎやぎやのう・さんまさんま そわか

以本清浄水

次 後鈴(前にあり)

おん ばざら・さとば あく

おん ばざら・げんだ としゃ こく

次 四智讃(前にあり)

おん ばざら・さとば・そうぎやらか

ばざら・あらたんのう まごたらん

ばらら・たらま・きややたい
ばらら・きやらま・きやろ はんば

次 本尊讚(前にあり)

きやまら・ぼきや きやまら・ろしゃのう きやまら・なのう きやまら・かさた きやまら・
はむぼに きやまら・きやまら・さんはんば さきやら・まら・きしゃのう のうぼう そと
てい

次 普供養印明并三力偈(前にあり)

おん あぼきや・ほじゃ まに・はんどま・ばじれい たたぎやた・びろきてい さんまんだ
はらさうらうん

次 三力偈

以我功德力

次 小祈願

普供養摩訶毘盧遮那佛

次 禮佛名號

曩謨摩訶毘盧遮那佛

次 廻向

所修功德

次 至心廻向

懺悔隨喜

次 解界(前に同じ)

先 大三昧耶

おん しょうぎやれい まか・さんまえん そわか

次 火院(金剛炎)

おん あさんま・ぎに うん はった

次 虚空網(金剛網)

おん びそほらたらきしゃ ばざら・はんじゃら うん はった

次馬頭

おん あみりと・どぼんば うん はった

次金剛墻(四方結)

おん さらさら ばざら・はらきやら うん はった

次金剛檪(地結)

おん きりきり ばざら・ぼじり ほら まんだ まんだ うん はった

次撥遣

おん はんどま・さどぼ きり ぼく

Om padma-sattva hri muh

オーン 蓮華(部の薩埵)(如意輪観音)よ、去られよ、ムフ

次三部被甲等(前にあり)

先佛部三昧耶

おん たたぎゃと・どはんばや そわか

次 蓮華部三昧耶

おん ほんどほ・どほんばや そわか

次 金剛部三昧耶

おん ばぞろ・どほんばや そわか

次 被甲護身

おん ばざら・ぎに・はらちはたや そわか

次 普禮（前にあり）

おん さらば・たたぎやた・はんなまんなのう きやろみ

次 出道場

仏教の瞑想行は釈尊の時から「止観」行であった。「止(samatha、シヤマタ、奢摩他)」は意識の表層に出入りする日常的な心理作用を静止し、意識を一つの対象に集中することであり、「観(vipassana、ヴィパシヤナー、毘鉢舍那)」は意識が集中している対象について真理に即した智慧により正しく観察すること。釈尊は、「止」によって世間苦の根本原因「無明(avidya)」を覚知し、「観」によって「十二因縁」を観想し「無明」を克服した。

いわゆるアビダルマ仏教は、この「止観」行における心理現象などを分析研究し、瞑想の対象の属性(色や形などを「ダルマ(法)」と言い、大乘の唯識(瑜伽行)の経論は「止」「観」を同時に行う「止観(の双運)」を主張し、密教はこれをシンボル化して「三密瑜伽(仏と行者の三密の等同(二体))とし、「五相成身観」や「入我我入観」「字輪観」や「阿字観」という観法を用いた。

「十八道念誦法」は真言密教の瞑想行の基本的な観法で、「入我我入観」や「字輪観」を中心に本尊(小野流では)如意輪観音を供養する仕立ての念誦法であり、「正念誦」「散念誦」なども真言念誦によって本尊と一体になる観法と言つてよく、加えて「観ぜよ」「想え」ではじまる「観(想)文」(真理に即した智慧による正しい観察文)が多いのも観法の証しである。

ちなみに「十八道」とは「十八道法」の略で、十八種の印明すなわち「十八契印」からなる行法である。具には、惠果和尚の口説・大師の作と伝えられる「十八契印」(大正蔵18巻・781)に説かれる「六法十八契印」のことで、以下の通りである。なお、大師の作と伝えられる「十八契印」

は、「観自在菩薩如意輪瑜伽」(大正蔵二十卷・二一〇六)や「観自在菩薩如意輪念誦儀軌」(大正蔵二十卷・二〇三)に説かれる「十八道」の要文の抜粋と言われている。

なお、好学の各位には、先師・先徳の「口決」等のほか『密教事相大系』(高井観海博士)・『秘密事相の研究』(梅尾祥雲博士)などを参照されたい。最近のものに「十八道の研究」(山口真司、『現代密教』第三号)がある。